

「未来へつなごう日本の文化」

from 新栄小学校

新栄小学校六年生は、総合的な学習の時間に、日本の伝統文化について学習しています。この秋は、三回の体験教室を開催しました。

〈第一回 木遣り体験教室〉

九月三十日（水）、豊山町木遣り保存会の方々をお迎えして、木遣りの歴史などを教えていただいた後、実際に木遣りを体験させてもらいました。はじめは、重い材木をかついで全員で合わせて動くのは難しいようでしたが、だんだん慣れてくると、かけ声も動きもそろそろようになり、楽しそうな子どもたちの声が体育館に響きました。



〈第二回 狂言教室〉

十月五日（月）、狂言師の野村又三郎さんを講師に、

狂言体験教室を行いました。野村先生の声はとも迫力があり、子どもたちは圧倒された様子でした。

狂言独特の話し方や動き方を練習し、室町から続く伝統の一端に触れることができました。

〈第三回 お抹茶を味わう会〉

十月八日（木）、茶道の家元（山田先生）から、茶道の所作や茶道具について教えていただきました。その後、自分たちでお茶をたて、お菓子とともに、季節を感じながら穏やかな気持ちでいただきました。

伝統文化を大切に受け継ぎ、未来へつなげていこうとする児童の育成を図っていきたいと思います。



第百八十五話

大正中期における婚姻

今の結婚は、本人の意思が尊重されます。しかし、戦前の結婚では、仲人が家と家を取りもっていました。

仲人は、親戚や知人、世話好きな人によって、家柄、財産を重視して女性または男性を紹介しました。人々からは「ちゅうにん」と呼ばれていました。

仲人の紹介を受けた家の人は、それぞれ近所に血統、財産、親、本人の気性などを聞きました。これを「きき合わせ」といいました。

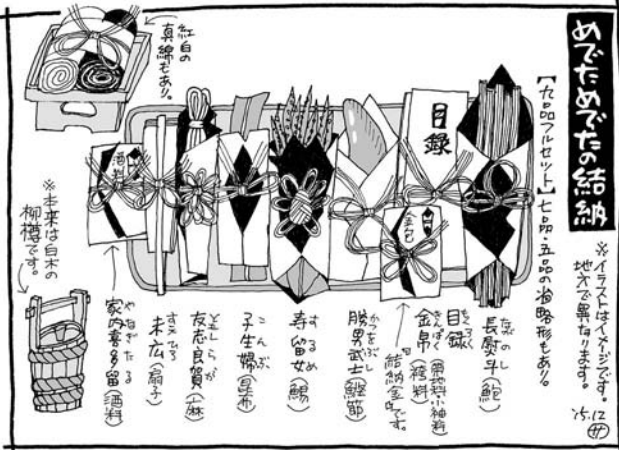
縁談があると、裁縫のけいこ帰りの女性を垣根越しにそっと見ることもありました。正式に男性が女性の家へ出向き、座敷に座ると、女性が着飾ってお茶を出します。しかし、すぐ下がってしまうので、両者ともあまりよく見ることはできませんでした。

見合いには親も同席するので、親がよいとなれば女性は文句を言わずにいたがいました。

男性は仲人を通して女性に承諾の伺いをしますが、女性は反対することはありませんでした。そこで結納を交わすことになりました。

大安の日の午前中、仲人と父親が女性側に結納の品を持参します。女性側では近親者を招いて披露を

めでためでたの結納



し、宴を開きました。

結納品は、家により異なりますが、一吊り十円から百円、二吊り二十円から二百円などまちまちでした。そのほか、扇、麻、すめ、昆布、紅白の真綿、兄弟への土産、先祖様への線香などそれぞれ三方の上のし紙に包み納められました。婚礼の当日結納返しとして、水引の色を変えて男性側へ持参しました。結納金のことを小袖料といいました。今は昔の物語です。
(豊山町文化財研究会の郷土文集を参考にしました)